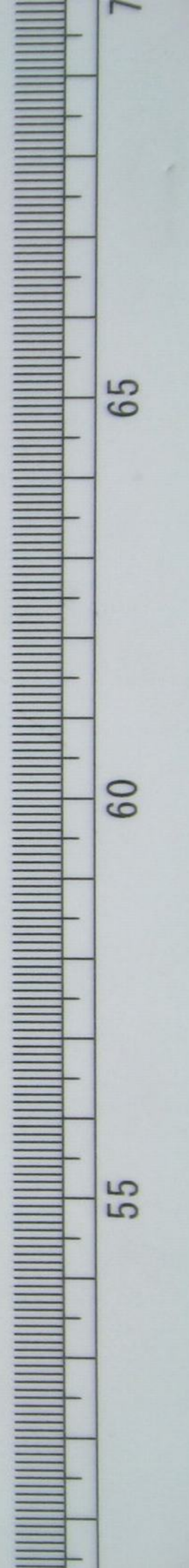




鹿兒嶋戰日記 五号



A429  
5



君 <sup>きみ</sup> がつん <sup>つん</sup> 忠 <sup>ちゆう</sup> 氏 <sup>し</sup>

筑 <sup>つく</sup> 造 <sup>ぞう</sup> 結 <sup>けつ</sup> 果 <sup>くわ</sup> 末 <sup>ま</sup> 末 <sup>ま</sup>

研 <sup>けん</sup> 磨 <sup>ま</sup> 磨 <sup>ま</sup> 磨 <sup>ま</sup>

武 <sup>ぶ</sup> 士 <sup>し</sup> け <sup>け</sup> み <sup>み</sup> ち

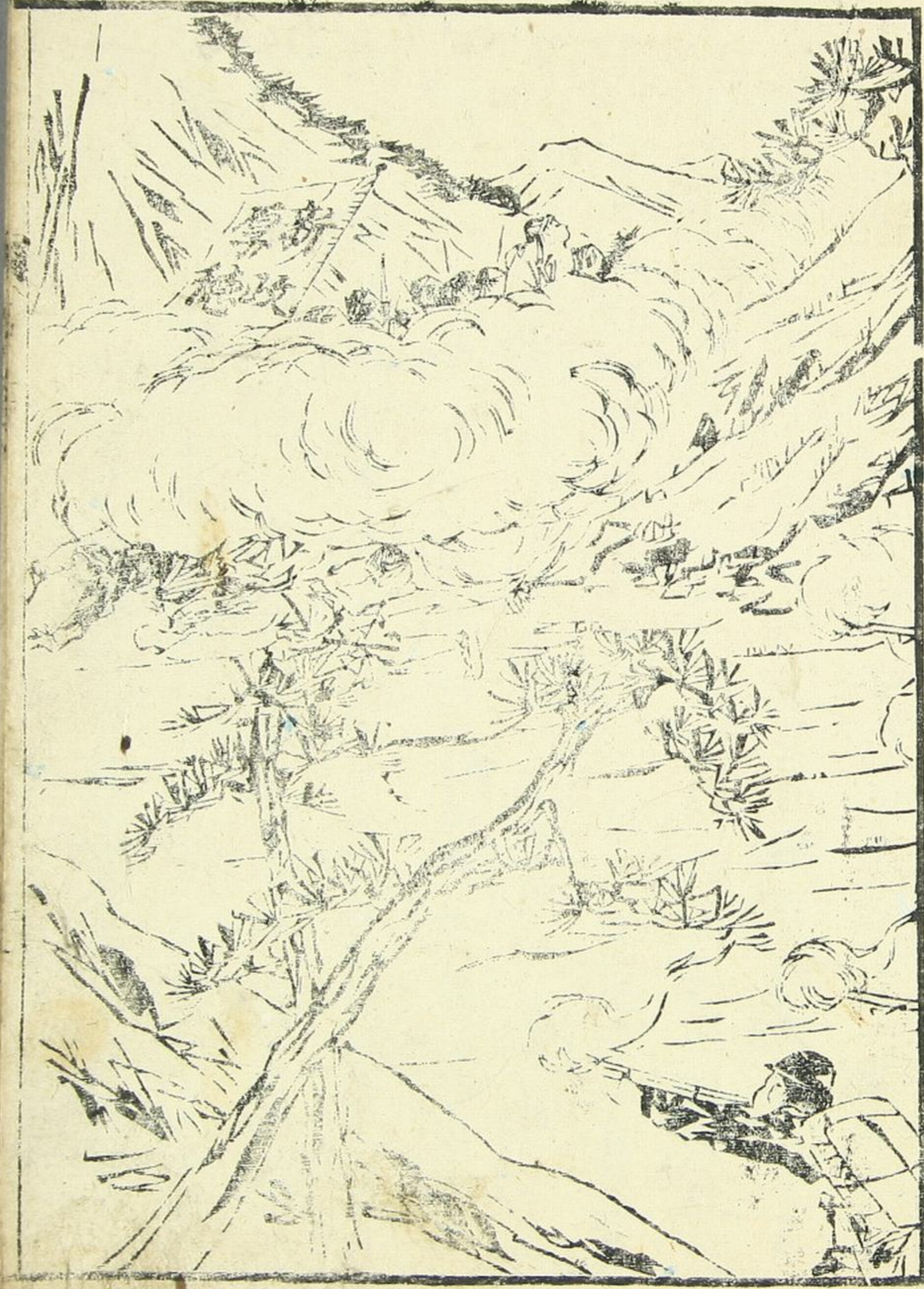
御 明治十年  
四月五日

此者ハ外科道具研磨の役

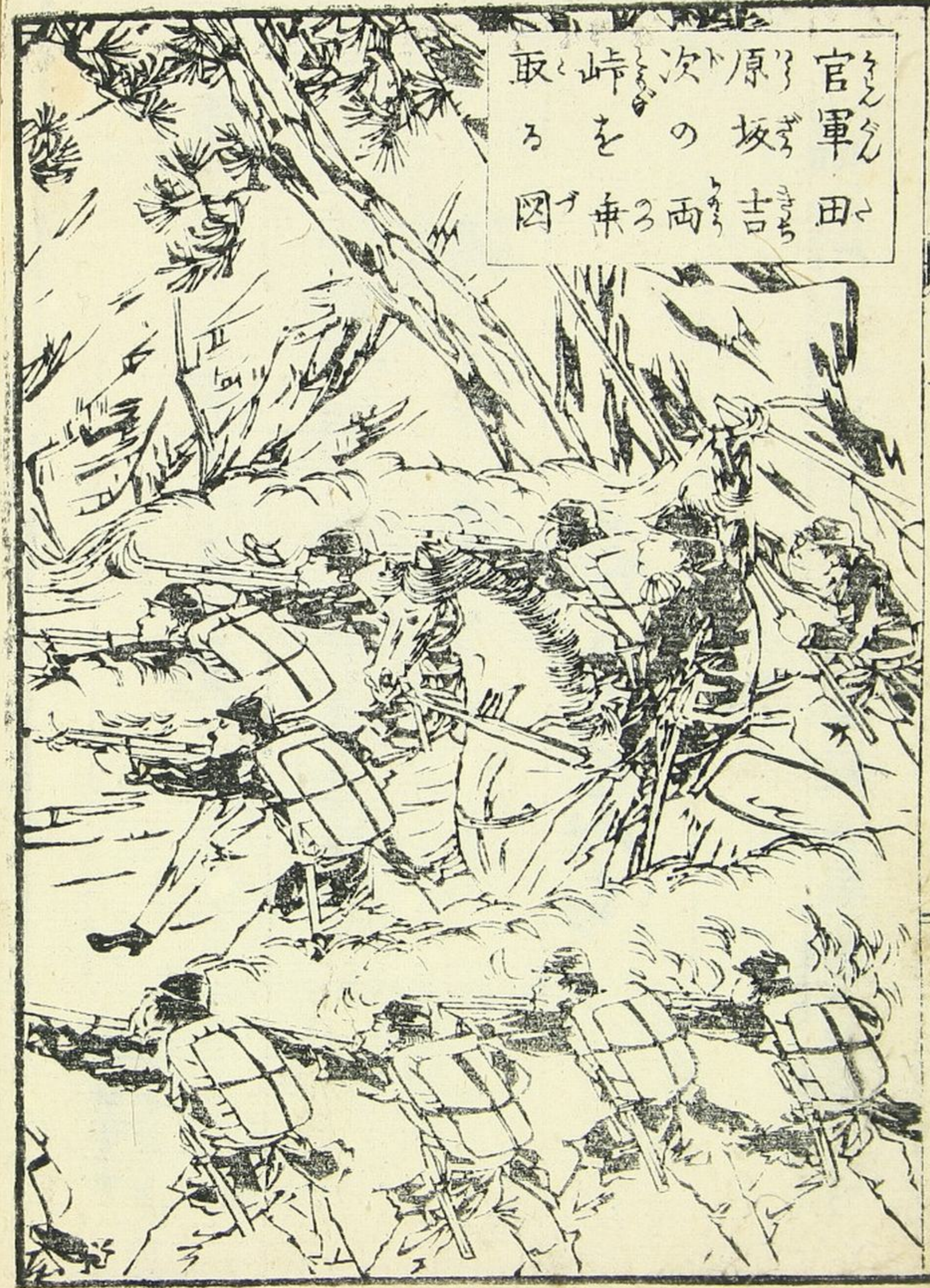
着病卒

杉本松五郎出立の節の吟

48-7881



官軍田原坂の次を峠取る  
吉原の両方乗る



官軍田原坂の次を峠取る  
吉原の両方乗る

去る程は三月二日、川路大警視が博多へ出帆のとた  
東京大坂の巡查六百人を随行しあり同日の夜大坂  
川口ふく蒸気大分丸より向ぐる所を拘引しと一ハ  
岩間小太郎をとり外十二人ありつづきも熊本の  
士族あてりりける紀州和哥山の火薬製造所よ  
うへ昼夜に弾丸三万発づり力製造のより一昨今山  
鹿高瀬植木の官軍が十分の備へよあり今月五日  
河内のたぐりひは福原大佐へ腹へ疵をうけられし  
と極浅手より別条ありと一六日福岡の黒田公より  
電報よ山縣参事へ木の葉の戦地よ居らば黒田公面

會され此日のたぐりひは勝利より黒田公の手より  
峠を乗つたり間道の田原吉次の両峠も同く乗つ  
たり此上の植木をとるに必定ありさされ熊本城  
へ脈を通ずるとりり同八月南の関の電報よ田原  
坂一ヶ所の臺場へあらむを官軍外は軍配をひ  
別の隊より植木へ進撃せしと一長崎よりの  
電報よ賊へ柳川長崎の二口へ向ひあひく進  
双方より苦戦し同日の夜熊本より電報城中  
よありり一鎮臺巡查より無事賊兵は今日六時よ  
川を解き柳川口よむりひる轉陣し西郷も其

方へむらひたりとあり八月へ田原坂に決戦し及び  
比基場と二ヶ所せち取り一ヶ所へ賊が堅く守つて  
あちむ先其日へ休戦する所の日山鹿口の戦ひ  
の模様ありとあり

○西国より東京九へ乗組と横濱に着の人の吐  
しふ過日官軍方四千人と賊兵四百人と戦ひ此四百  
人の中々の強兵よく殊の外手づよく軍功者と云と  
あり三月四日山鹿口を討死せし賊の懐中より一  
手帳と彼奴の中間ありて今月三日までの討死が五百  
人余と認めありとあり

○勅使柳原公と黒田公の率わらむ七艘の軍艦  
へ黄竜丸へ勅使玄武丸へ黒田公がのり込まれ  
竜驥艦清輝艦金川丸へ巡查のりし玄海丸春  
日艦の二艘へ陸軍兵のりし鹿見島へ出帆され  
日進艦へ八日長崎へ着し猛春艦へ七日同所へ着  
し今月五日名古屋より一大隊大津へむけし出兵  
軍隊の病院へいよく下の関へきりめし是借植木の  
兵もやうやく熊本城へ通むるやうもあり官軍  
いさむく威をみせむると

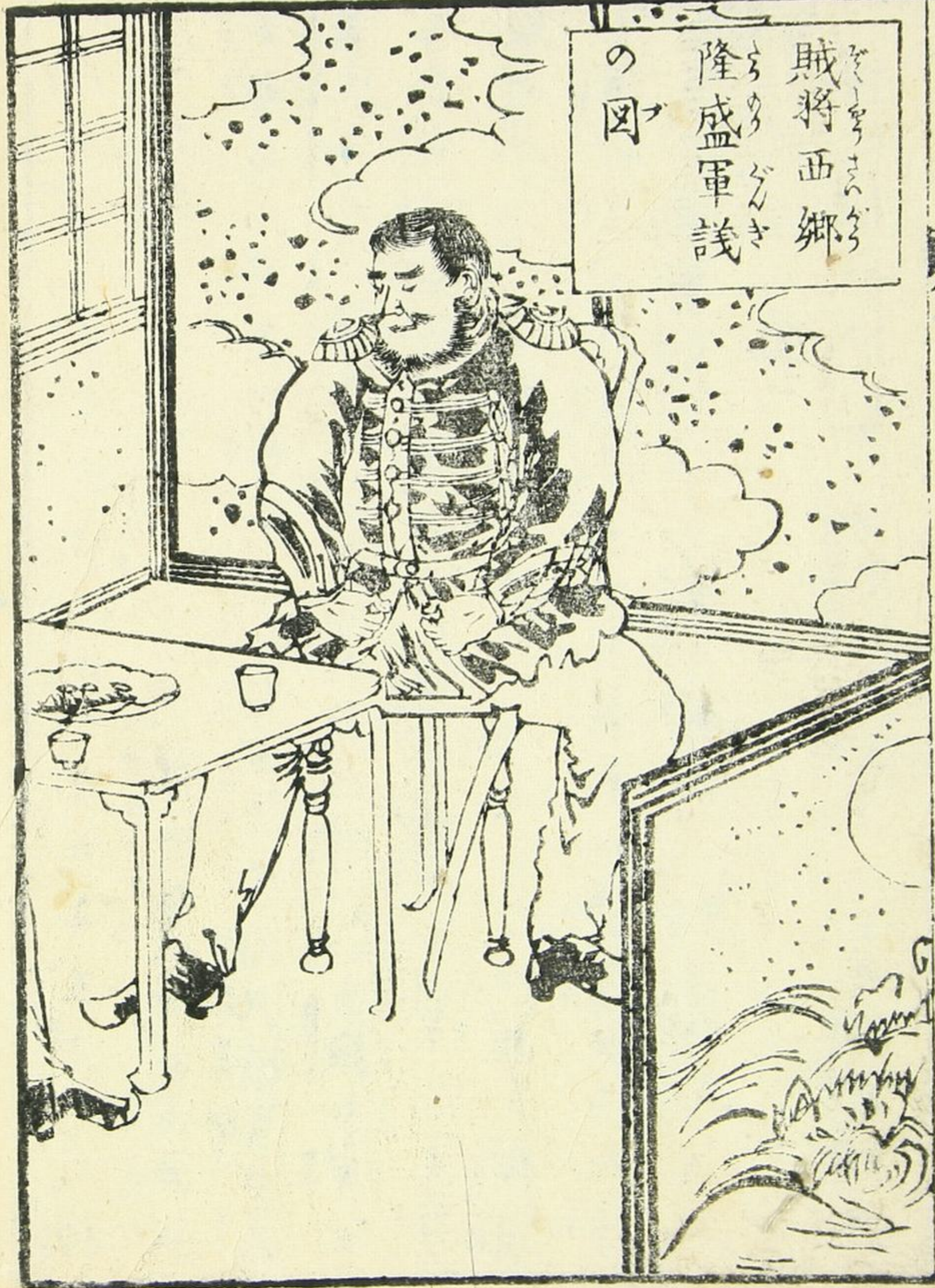
○陸軍士官学校づめの喇叭卒が戦地より出で

思ひ書あはせしに脱走し又同校の生徒のうちを勇  
 と立ち頼りふ軍ふ出張を願ひ出せしめ沢山ゆれど  
 聞きけたるは依て脱走せしとあり  
 ○前よ出せし三艘よのり組し鎮臺兵の一大隊よて  
 巡査の部江口君二百人余国分君二百人余迫  
 田君三百人余と引つとられ又檜垣君よの巡査  
 五百人余引つと大分縣をかめらると福島よ居  
 る巡査百人を戦地へまくと佐賀の百人は同所よ居  
 たり綿貫君の手つ四百人といも熊本城内よ居  
 らるる

○市ヶ谷士官学校の生徒へ九日よ五十四人神  
 戸へ出立よあり陸軍より河津少佐の下の岡池田  
 重華君の博多へ松本正足村田経芳岡沢精岡田善  
 長大河内正質田村昌家の六君へ神戸へ出張と命ぜ  
 らる東京碓泊の瓊浦丸の弾銃鉄炮をつとる陸  
 軍のかとくと兵士が二百人余りふんて九日横濱  
 を出帆しまた東京丸へも東京の鎮臺が二大隊  
 その外海軍省よりも多人数のり組んぞ十日横  
 濱と出帆よある  
 ○九日の夕方よの田原坂の左りのよ内原村の



賊將西郷  
隆盛軍議  
の図



賊聖と三ヶ所攻取一也植木と攻るふ都合よく  
多分昨十一月より熊本城と道がほぐまきしうと  
云又長崎破船の孟春艦の九日の朝出帆一肥後  
海へまろ丁卯艦も十日の明が長崎へ着し燈臺  
丸の長崎より鹿見島へまろ大坂小居られし内  
務卿より急よ木梨精一郎と召され木梨君の明十  
三日ごろ大坂と出帆といふ  
○島津老公の此を病死といふ風聞もあつり  
○陸軍本病院より戦地に向けらるし一看病卒の内  
杉本松五郎の外科の器械と研磨する役と命ぜ

らと出立のとたよ「君がため忠と筑紫の果まで  
もとたえみかん武士のとら」とよんご勇ましく  
出立あつり  
○二品親王伏見貞愛宮の西国鎮撫使を命ぜり是  
今月九日よ西国へ出帆され山縣参軍と大山少將  
の高瀬口へまろ豊後よりあつりせし日田郡辺で  
今ふ薩州が天下ととりとく老人子供の畏縮しそ  
居るといふ先月二十七日の戦ひは暴徒の三里  
ほど追ひ退けられ勢ひのくしけしと云知せり  
有栖川の宮の博多ふら着しありしといふつけ官

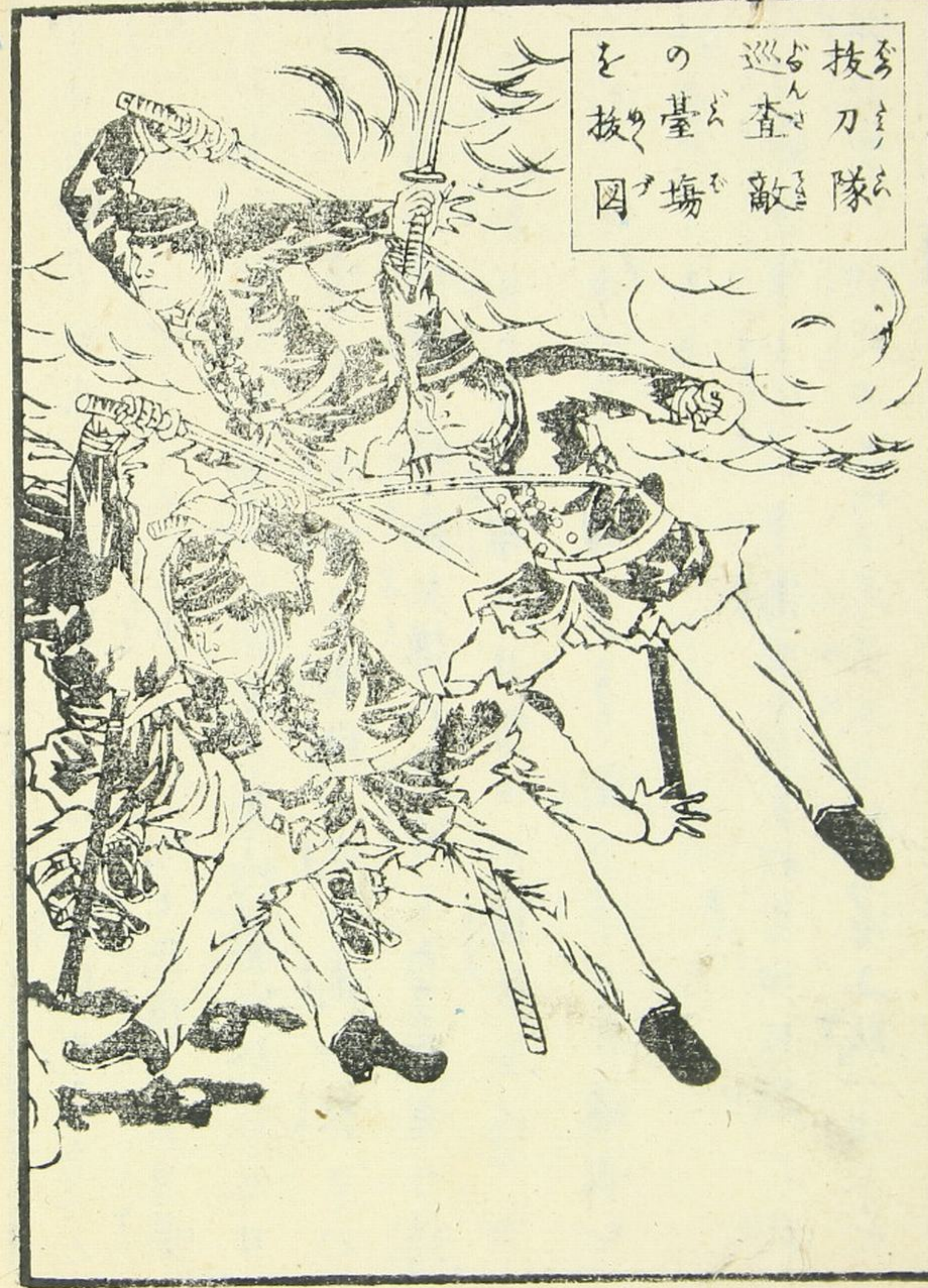


軍の勢ひ破竹のごとくありそまが為土地の人  
ぐ大きふ安心せしよまき佐賀の士族石井武之  
助徳又孝次郎ハ先年佐賀動搖のとき行方知れ  
をちの程暴徒よまきしそ夫兵を率ひて居ると  
り風聞あり

○十一日の知らせ南の関より官軍の本営と  
高瀬までまきめらまき又十日より休戦とつふ  
○長崎出のまきせし勅使へ九日小鹿見島へ着せ  
られ翌十日勅使と勤めし巡査まきものまきま  
上陸あり又同日午前十時十五分長崎よりあり

せし鹿見島無事と事まきとありハ勅使のまきま  
総督有栖川宮より官軍ご慰勞と死傷人の見舞  
と高頼侍従番長と猿渡六等侍醫と今月九日  
彼の地へ遣はされ扱熊本縣廳へ南の関へ移され  
下の関の税関ハ警衛兵隊の詰所とあり東京の鎮  
臺兵ハ先日より水曜日日曜日の遊歩をまきめ  
られ一ダ十一日日曜日より闇より遊歩と  
許さしとあり

○三好陸軍少將ハ手傷をうけられし由又賊の西  
郷小平へ討死のうけ久苗米の知らせ小賊ハ決して



をの 巡ら 技を  
抜り 臺を 査し 刀を  
囚へ 場を 敵に 隊を

筑後へ入るゝと又佐賀平穩とあり

○庄内の士民の去月十八九日のところ此所彼所は屯

集したるが日よまゝ人数も之終つて七八十名及び

越後路へ向け出立すまきめありありとぞ

○伏見貞愛親王の鎮撫使を命ぜられ征討参軍

山縣君へ随行仰せつけりしなり

○此程の事変うそ東京をとり諸方よりくり出りの

兵隊凡そ廿四大隊を賊の戦死傷人の何れを数

あれを官軍の兵も死傷手負あり四百人八近

東京へまゝされ療治するあり

○同十四日大坂の報知は十三日午前四時巡

査隊百人三手は別う三臺場へとぐく刀を抜て

切り込み数日抜けざる臺場を暫時に乗つたり

戦死の警部補が二人巡查が八人をとり手負が十人

程とあり又同日午前八時五十分のあつせふ中原

をとり親しく井上をとり慰勞させしと悦び謹

で命を待つたり又大坂の出の電報は長崎よ

りの報知あり黒田中将の帰航其外中原初め

当警察所へ仮に受とり置今明日の警視官も当

港へ着の筈とあり又鹿兒島のやうまの長崎より知

らせし弾薬三十一万発と火薬数十万斤その外鉛の  
延板銅板各所は仕まひりしと残らば見出し押へ  
あた又鹿見島弾薬製造器械などの鹿見島丸よ  
て廻ま手筈はあり最早根元をあたへ此際は大挙  
進撃してまうるべき見こむ

○島津従二位父子と旧門閥の面々の鹿見島縣下  
の人々と鎮静する事を尽かさうとする  
○官兵の怪我人五百人十七日大坂と出帆のころ  
十四日小野田君より知らせし明朝より巡查進  
撃の筈とあり余ハ六号は説く

